

加藤弘之氏の早すぎる死を悼む

菊池 一隆

神戸大学の加藤弘之氏が60歳という若さで逝去した。北京大使館勤務で訪中する以前は元気であったことを思い出すと、未だに信じられない気持ちである。ところで、加藤氏とは、私が1984年に大阪に赴任した時からであるから実に30年余の付き合いとなる。その間のことが走馬燈のように思い出される。私は初めて加藤氏に会ったのは、おそらく1984年で現代史研究会の席であったような気がする。彼は当時、大阪外大助手であったと思うが、とにかく元気がよかった。

現在、中国現代史研究会の総会、研究合宿は大阪近辺などで一日、もしくは一泊二日で開催しているが、当時は、例えば、和歌山県白浜や滋賀県の琵琶湖周辺などで一泊二日、もしくは二泊三日で開催していた。結構、沢山の人々が泊まり、夜は酒を飲みながらよく議論したものだ。加藤氏は評論、エッセー、小説などもよく読んでいて、それを話題にした。そこからヒントを受け、論文、書評、あるいは報告などでも生かしていた。また、大阪などで開催した定例の現代史研例会などでは、石田浩、上原一慶、そして加藤弘之各氏などもよく出席した。農業経済、社会主義経済、そして現代経済がそれぞれの専門で活力ある3人が並んで坐ることが多く、なかなか迫力があつた(その3人ともすでに鬼籍に入つた。当時のことが夢のように思い出される)。

周知の如く、加藤弘之氏は現代史研究会では世話人(理事)、編集長などを歴任し、研究会を盛り立てた。私は加藤氏に「5、6年間も編集長をやっているし、現在、名古屋に住んでいるし、結構大変」と言ったことがある。彼はその時は何も言わなかったけれども、役割分担の決定の時、「おみくじを引いたら、何かの役を引き受けると、よいことがあると書いてあつた。それで菊池さんの後の編集長を僕がやる」と言って私に笑いかけた。このように、何気ない優しさを持っていた。

『新・図説 中国近現代史一日中新時代の見取り図一』(法律文化社)は田中仁・菊池・加藤・日野・岡本の5人の共同分担執筆であつた。そのため、京都に集まり、何度かやりとりをし、議論をし、また飲み会もあつた。その間も次第に加藤氏の体調が悪くなり、皆が心配していた。呂律が回らなくなり、何を言っているのか分からない時もあつた。また、頭髮が抜けた時期もあつた。だが、そうした見た目とは逆に快活に振る舞っていた。本書のサブタイトルの「日中新時代の見取り図」は加藤氏の命名である。彼は「5人の手作りの本で楽しかったね」と言った。それが私が加藤氏と共にやった最初で最後の仕事となつた。

毎年、年賀状のやりとりだけは欠かしたことがなかつた。彼も私も歩き続けながら考え

る、ある意味で同じタイプの研究者かもしれない。加藤氏の年賀状には訪れた中国、東南アジアなどの写真が刷り込まれ、各地での感想が一筆書かれていた。ただ、ここ数年は過去に訪れたところなどの感想が多く、寂しさをにじませる一筆が多くなり、最後となった年賀状には、「世界を駆けめぐる菊池さんが羨ましい」と書かれてあった。

最近、時勢に流され、始めから結論を用意し、単純に「白か黒」かで二元的に発想する研究者が漸増している中、あらゆることからヒントを受け、自ら考え、中国という複雑な事象に柔軟に、かつ鋭く多元的にアプローチしていく加藤氏のような人物を失ったことは実に惜しい。中国研究、否、何かを求めて人生という「戦場」を歩む「戦友」を失ったような喪失感を感じるのを禁じ得ない。このように、研究面でも学ぶことが多かったが、私にとって加藤氏の強い生き方、姿勢に学ぶべき点が多々あった。中国から帰国後、甲状腺癌が次第に悪化し、充分話せない状況が何年も続いたが、彼はそれでも臆すことなく講義（大学院なので少人数とは思うが）をし、研究会や学会に出席し発言を続け、著書、共著を出し続けた。皆、「大丈夫か？」と心配しつつも一つの生き方として心から畏敬の念を持っていたと思う。

（きくち かずたか・愛知学院大学）